



中原中也初期詩篇研究 : 1930年前後までの詩的ボ リティクス

著者	佐藤 元紀
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7198号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00125766

氏名（本籍）	佐藤元紀
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7198 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	中原中也初期詩篇研究—1930年前後までの詩的ポリティクス—

主査	筑波大学教授	博士（文学）	新保 邦寛
副査	筑波大学教授	博士（人文科学）	清登 典子
副査	筑波大学准教授	博士（学術）	秋山佳奈子
副査	筑波大学准教授	博士（文学）	稀代麻也子
副査	筑波大学准教授	博士（文学）	近本 謙介

論文の要旨

本論文は、近代そのものの見直しが要請された大正末期に詩人として歩み出した中原中也が、転形期の困難と闘いつついかなる詩観や創作方法を確立するに到ったかを描き出そうとしたものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序論

第一章 中原中也初期詩篇を問う意義

第二章 大岡昇平「中原中也伝」論—〈近代的自我〉批判の小説としての試み—

本論

第Ⅰ部 「ノート 1924」とその時代

第一章 「ダダイスト」が恋を歌うこと—中原中也「ノート 1924」におけるダダの意義—

第二章 揺らぐ私とその行方—中原中也「ノート 1924」における〈時〉をめぐって—

第三章 「認識以前に書かれた詩」から〈詩〉へ—中原中也「ノート 1924」と〈詩〉の問題をめぐって—

第Ⅱ部 「白痴群」創刊前後

第一章 〈文語定型詩〉という戦略—中原中也「朝の歌」、「臨終」が示すもの—

第二章 「白痴」たちの「夢」—中原中也「詩友に」、「寒い夜の自画像」をめぐって—

第Ⅲ部 『山羊の歌』成立に向けて

第一章 中原中也「春の夜」とヴェルレーヌ「白き月かげ」—陶醉という詩法—

第二章 中原中也「修羅街輓歌」と「精神」の探求—フランス文学受容の一側面—

結論

序論は二章で構成され、第一章では、生前顧みられなかった中原中也が、死を契機に、近代の超克の理念像であったランボーに擬せられ、祭り上げられて行く経緯について言及し、続く第二章では、そうした虚像に異議を

申し立てた大岡昇平も、その「中原中也伝」にあっては、戦後の〈近代的自我〉史観の裏返しのイデオロギッシュな像に陥らざるを得なかった事情を詳らかにしていく。そしてそれをもって、こうした詩人像を概念枠とする従来の研究への批判とし、併せて作品解釈と同時代思潮に基づいてその詩的歩みが描き出されねばならないと主張している。

本論は三部構成で、第Ⅰ部においては、伝記史料としか見做されていなかった習作ノートを考察している。第一章では、特に伝記資料的扱いが著しい恋愛詩のうち、同時代に流布した厨川白村の教養主義的恋愛観の反措定として書かれた「頁頁頁」に、〈認識以前〉なる西田幾多郎由来の術語がある点に注目し、この詩が、不安な時代を逃れるべく哲学に依存した結果、社会の硬直化を招いた反省から、本能への回帰を叫んだダダイストの事蹟に向けた讃辞に他ならないと述べている。第二章では、自身の過去の心象に縛られて、刻々と変わる景物、すなわちベルクソンの〈純粹持続〉としての時と齟齬を来した詩的主体が、その理性的認識の呪縛を抜け出し、目の前の景物と一体化するに到るという「春の日の夕暮」を論じている。こうした体験は他の詩でも繰り返し変奏されていくものの、要するに西田哲学の説く〈主客合一〉の境地に立って、真の实在を捉えようとする思いに他ならず、正にそれが、ノート詩篇で模索された課題であったとする。第三章では、〈認識以前に書かれた詩〉の存在を問う「古代土器の印象」を取り上げている。この西田哲学的な問いを突き付けられた〈土人〉は、ただ行為によって応じようとするが、言葉で表現せねばならない詩人は、その問いを矛盾として抱え込む他はない。こうした形而上学的難問は、近代の超剋を共通課題とした超党派の〈詩話会〉のものでもあり、ダダイスト高橋新吉に到っては、その為に〈発狂〉したと言われていたことを思うと、その後の中原が、「(最も純粹に意地悪い奴)」などで〈自棄〉なる主張を繰り返すのも、〈認識以前〉の詩を書く方法であったことが分かる、と論じている。ただしこうした詩が書かれることはなく、ノート詩篇の段階では、詩観の提示に止まったと結んでいる。

第Ⅱ部では、詩壇デビュー作を取り上げ、中原が習作で提示した〈認識以前〉を夢に見出し、それを描く方法をめぐって詩作を重ねる様態を問題にしていく。第一章においては、雑誌『スルヤ』掲載の〈歌詞〉と銘打つ二篇を考察している。薄らいでいく夢を認識可能な朝の目覚めの瞬間に詩の成立を見る「朝の歌」は、散文化し、夢への回路を失った口語自由詩に変わって文語定型詩を採択しているが、それは、感情表現と不可分な音数律の再評価というだけではなく、多様な助動詞や切字の使用が〈内在律〉を生み出すからに他ならない、と論じている。さらに「臨終」では、ベートーヴェンが切り開いた感情表出を主題とする〈絶対音楽〉が、夢を描く方法として参照された、とする。続く第二章では、中原が詩壇革新を期して創刊した『白痴群』の主旨に基づき発表した二篇を考察している。「詩友に」は、世俗を拒み、自らの魂に従い〈うまし夢〉を見ようと、雑誌の同人に訴えた詩だが、実は詩観の発信であったことが、それに応じ書かれた安原喜弘「詩一篇」によって窺えるとしている。「寒き夜の自画像」でも、〈魂の願ふこと〉に誠実であれと訴えていて、やはりそれが夢を描く為の方法であることが看取できると述べている。

第Ⅲ部では、東京帝国大学の辰野隆の研究グループの発信するフランス象徴主義の最新情報を摂取した中原が、夢を描くべく具体的な方法を確立する過程に言及している。第一章で取り上げる「春の夜」は、無意識の夢が、陶酔により音楽となって経験世界に溢れ出す様を描いた詩だが、ヴェルレーヌの詩は夢みる状態を音楽として捉えているという堀口大学の指摘や、多く翻訳が試みられたヴェルレーヌの「白き月かげ」が、美しい夜景に詩人の内面が交響する夢の世界にさ迷うことを〈陶酔のとき〉と述べていることなどから、ヴェルレーヌの詩法に学んだ作と述べている。第二章ではやはり、ヴェルレーヌ「叡智」の影響で成り立った「修羅街輓歌」を問題にしている。無意識の思いを〈神恵〉の如く感受できる幼い魂に帰することで、現実の硬直した意識と訣別しようとするこの詩は、当時の『白痴群』同人の関心のありように照らしてみれば、無意識を描く方法の問題として書かれていたことが明らかであるとする。また、〈精神の危機〉を乗り越える自己の確立を目差していた同人らは、辰野研究室発信のフランス文学の最新情報に導かれるまま、無意識を見る内なる神としての魂を見出すに到るが、中原にあっては、それが、夢みる心を客観視する視座の定位となっていく、と述べている。

結章において、以上の論述を再度概観し、最後に「盲目の秋」を、〈認識以前〉の詩の例として示し、結論としている。

2

審査の要旨

1 批評

中原中也が詩人として歩み始めるに際し、いかなる詩観と創作方法を確立したかは、重要な問題であるにも

拘らず、それに関する本格的な考究がなされたことがない。中原の初期詩篇は、〈和製ランボー〉なる「四季」派の戦略的イメージや、アイデンティティを問い続ける詩人といった大岡昇平の戦後理念に基づく虚像が、解釈コードとなって研究を支配したため、とうてい正當に読まれたとは言い難いし、習作期の作品に到っては、彼が生前全く顧みられなかったことが禍いしてか、伝記資料くらいにしか扱われなかった。

著者は、以上のような現況を踏まえ、先ず習作詩篇を丹念に読解するところから研究を始めた。しかしその飛躍の多い難解な詩句を読み解くためには、大正期の多様な思想や文芸思潮が錯綜する情況に分け入らねばならないが、その困難な作業を粘り強く積み重ねた結果、中原の習作期の詩作が、何よりもベルクソンの〈エラン・ビタル〉や西田幾多郎の説く〈主客合一〉の世界を捉えることを起点とし、最終的には〈認識以前〉の詩という詩観に帰着するものであったことを明らかにしている。のみならず西田哲学などと同様の思考の産物である〈ダダイズム〉やシュティルナー『自我経』のように同時代の青年を魅了した芸術・思想を摂取することで、多彩な表現世界を切り開いたことを明らかにしているという点において、高く評価できる。

かくして中原の詩観を突き止めたことは、彼の初期詩篇を捉える新たな視座を提供することとなり、つまりは、それらの詩篇が夢をテーマとするのも、〈認識以前〉の詩なる詩観のしからしむるところであったと知れる。それ故また、その詩作は、夢を描く方法を模索する過程でもあった筈で、正に本論文は、韻律を取り戻すべく文語定型詩を再評価する点や、没後百年を迎え注目の的になっていたベートーヴェンの〈絶対音楽〉を詩作の参照点とすることなどに言及し、いわば中原が、音楽性への傾斜を深めていった末、夢を音楽として捉えるヴェルレーヌの詩法を見出すに到ったという道筋を描き出すことになっていて、見事である。

さらに著者は、当時、東京帝国大学でフランス象徴詩の最新情報を発信していた辰野隆に、中原が接近していた事実を掘り起こしている。それによって、ヴァレリー『ヴァリエテ』を知り、夢を描くための超越的視点の定位を学んだことで、〈認識以前〉を描くという、詩観と方法の矛盾を解消するに到ったとする指摘は、今後『山羊の歌』を捉えていく上で極めて重要である。

もとより瑕瑾がない訳ではない。特に後半の文章が、魂・心・精神などの類義語の意味内容が曖昧なまま使用されているため、論理的明瞭さを欠いた論述に陥る傾向が見られなくはない。

また、中原の詩観のもととなった〈主客合一〉は、日本のような精神風土にあっては特別なものではない。同時代の梶井基次郎や川端康成の小説にも見出せるし、明治期の北村透谷の文学観でもあった。禅宗の考え方に淵源があると思われるが、その点を考慮すべきではなかったか。更にこうした詩観や創作方法を確立したことと、『山羊の歌』の関係について言及があってもよかったと思う。ただしいずれも今後の研究課題と言うべきで、本論文の価値を些かも低めるものではない。本論文が中原中也研究を新たな局面に導いた功績は極めて大きい。

2 最終試験

平成 27 年 1 月 21 日、人文社会科学科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。